

私の一冊

看護学科 前野真由美 先生

中島紀恵子、北川公子編 『老年看護の縦横な語り:ライブ中島紀恵子と教え子たち』
(クオリティケア)

いつもものごとを考え、自分を尊重して、相手を尊重して生きていくこと、そのプロセス(過程)がとても重要であることの根幹を考えるのに道標となる本である。

本は、老年看護学を研究してきた中島紀恵子とその教え子たちとの勉強会を経て、出版された。勉強会は5回。勉強会のテーマが本のアウトラインになっている。私も、1980年代からの教え子として、勉強会に参加した。教え子たちが中島紀恵子に問い、中島紀恵子が教え子たちに語る。その本の一部を紹介する。

『自立』

中島紀恵子は『自立』について次のように述べている。「『自立』とは日々の複雑な生活の営みに対処できる身体操作技法を環境や状況に応じてアレンジできる意識的な行為」である。そして、「われわれにできる最大の仕事は、『自立』への挑戦を停止させる環境を最小限に取り除くことでしょう。“残された能力”が生かされない環境下かどうかに関心を持たないで、その改善に努力する必要さえ気づかずに、『自立』か『依存』の二つに単純化した『自立』の考え方は間違いです。」

教え子は次のように問い、中島紀恵子は次のように語る。

前野:自立には「積極的自立」と「消極的自立」、「積極的依存」と「消極的依存」の四つがあると教科書で先生は書いてある。これがわかりにくいです。

中島:一般的に看護学における人間のとらえは、手助けなしの状況を基準においてアセスメントを考えており、援助はその人が自己に要請する事柄に対応して、自己ケアを再構成できる能力をアセスメントするというものですね。意思ある人間とは、自己に要請する事柄に対応する能動性それ自体に、自己尊厳という価値を行為・行動に表現されているという人間観に基づいた観察力からみえる実体をいいます。人間は生きている限りにおいて意思を持っている。いうところの植物人間にしても、重度認知症者にしてもです。援助の命題もここにあります。

中島：…自立と非自立があるのではなく、非自立を依存と考えるべきでもなく、自立と依存は主体者にとって連続性のあるもので、その様相は状況によって一様ではないことを示したかった。…自立は全ての環境作用に左右される“ひ弱な”存在なのです。積極的を“能動的”、消極的を“受動的”に置き換えた方が理解されやすいだろうことはわかっていたのですが、それをすると意思のある人間のところがぼやけてしまうので。…

以上が本の一部である。私は、中島の語りを、頭をフルに使って、解読しようと何度も読み直した。そして、私は、次のように考えるようになった。「『自立』とは意思を伝えることである。」そして、「意思を伝えようとする環境を整える、意思が伝わる環境を整えることこそが『自立』へつづく看護である。」と。中島は「自立は全ての環境作用に左右される“ひ弱な”存在」という。“ひ弱な存在”を支えるのは看護である。“ひ弱な”自立(意思を伝えること)を支えるためには、環境を整える看護師が必要である。看護師そのものが、存在そのものが、環境となるよう求められているのかもしれない。

この本を読んでいると奥底に眠っていた何か大切なものがまた光輝くような気になる。頭をよく使うのだろう。

いつも、丁寧にものごとを考え、自分を尊重して生き、そのプロセス(過程)を大事にすることが重要であると言っている本であると思う。そして、一緒に歩む方の意思を尊重する看護とは何かと問い続ける。そこにつながる本であると思う。お勧めします。